冬の虹

津村節子

新潮社版

冬の虹

津村節子

新潮社

冬の虹

昭和五十六年 二月二十日 発行
昭和五十七年 七月二十五日 二刷

著者 津村節子

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社
郵便番号一六二 東京都新宿区矢来町七一
電話 業務〇三(二六六)五一一一
編集〇三(二六六)五四一一 振替東京四―八〇八

印刷所 東洋印刷株式会社

製本所 神田加藤製本

定価一一〇〇円

© Setsuko Tsumura 1981 Printed in Japan
乱丁・落丁本は，御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

冬の虹／目次

悪い夢　7
追い討ち　19
窮鳥　39
朝やけ　54
藍のれん　74
波紋　92
訃音　108
郷愁の古ぎれ　122

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

挑戦　141
ひめごと　155
手さぐりの道　168
背水の陣　187
南の旅　203
門出　216
あとがき　234

装画　加藤　一

冬の虹

悪い夢

暁子は、自分のうめき声に目を覚した。

いやな夢を見ていた。何者かに追われている夢だった。いや、人間かけだものかもわからない。為体の知れぬ黒い影が、どこまでも執拗に追ってくる。

生臭く荒い息が、すぐ背後に迫っていた。暁子は恐怖で声もあげられない。足がもつれ、軀がのめって転倒した。その時漸く目が覚めた。

夢の中の恐怖と息苦しさがまだ続いていて、暁子はあえぐように息をついた。全身に汗をかいて、濡れたパジャマが冷たく肌に密着している。

傍らのベッドに目をやると、夫の姿がない。暁子は漸く夢から現実にもどり、サイドテーブルの時計を見た。青い螢光塗料が塗られている針が、五時十五分を指している。

昨夜も夫の帰りを十二時まで待っていたが、それ以上起きていると朝に差し障るので、先に寝ることにした。娘の香織は、この春近くの公立の小学校からミッション系の私立中学に進学したので、通学に一時間近くかかる。六時には起きて食事の支度をし、給食がないので弁当を作ってやらねばならない。

夫の帰宅が遅くなることは珍しくなかった。かれは広告会社の営業部に勤務しており、広告主の接待だと言って飲んで帰って来ることが多い。夕食の準備があるから、遅くなる場合は電話してくれ、とこれまで何度も言っているのだが、いちいちそんなことをしている暇はない、と言う。

帰って来るか来ないかわからぬ夫のために食事の支度をし、時間が過ぎるまで待っていることはやりきれなかった。が、この頃ではむしろ、夕食までに帰ってくれぬほうが楽だと思うようになっていた。冷凍庫に余分に作ってしまった料理を保存しておき、電子レンジを活用することも覚えた。

それでも時には、うちは母子家庭ね、と淋しさに堪えかねて言うこともあった。

「仕方がないじゃないか。おれだって遊んでいるわけじゃなし」

疲労の濃い顔でそう言われると夫が気の毒になり、責めることもできなくなる。

何時に帰るかわからぬ夫は、鍵を持っていて自分で玄関を開けてはいる。暁子は一日働いて疲れて帰って来る夫も待たず、先に寝ることに抵抗があったが、待っていられてはかえっていやがらせをされているようだ、と言うのだ。

はじめは気にかかってなかなか寝つけなかったが、マンションのコンクリートの廊下を歩く靴音にも、玄関のドアの開く音にも目覚めなくなった。さすがに、寝室のドアが開かれる音には気づくが、着替えを手伝うとすっかり目が覚めてしまうので、起きることもしなくなっている。

苦しいいやな夢にうなされて目を覚した暁子は、汗で濡れたパジャマを着替えた。夫の帰宅は遅いと言っても、二時か三時である。五時過ぎというのはいささか異常であった。夜がかなり長くなっていたが、雨戸のない天窓から見える空は、もう白んでいた。

明け方までやっているバーがあるということを聞いたことがある。あるいは友人の家で、酔い潰れたのかもしれない。徹夜で麻雀をする者もあるのだから、夫だけが例外というわけではないだろう。麻雀はきらいではない。正月休みなどには、温泉地にある会社の寮で、泊り込みでやることもある。

暁子は、もう一眠りしようとベッドにはいり、目を閉じた。が、一度覚めると容易に寝つけないたちである。眠れないのであれこれ余計なことを考える。それで一層目が冴えてしまう。

女、ということは考えなかった。浮気なら用心深くなるはずである。疑われるようなことはすまい。朝帰りなど最も不手際である。

もしや、事故では——

自動車にはねられるとか、心臓とか脳とかの、急な病気とか。

夫はまだ四十歳になったばかりである。だが、壮年で急死する人が最近多いと週刊誌で読んだ。働き過ぎが原因だという。いやな夢を見たせいか、暁子の思いは不吉な想像に傾いてゆく。

突然鳴り響いた目覚しの音に、暁子は飛び上がるほど驚かされた。が、それがショックになってつぎつぎに湧き上がる想念を払いのけ、朝食の支度にかかった。

よく晴れた朝であった。

窓を開け放って、室内に淀んでいた空気と冷たい外気を入れ換え、ガスに点火した。湯が煮えたぎる音がして来ると、漸く気分が明るくなった。

眠たがる香織を起し、二人で朝食のテーブルに着く頃には、つまらぬ心配をしたことがおかしくなった。

香織は、父の靴が玄関にないことに気づき、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

「あら、お父さんは？　ゆうべ帰らなかったの？」
と言った。
「そう。遅くなったので、お友達のところへ泊ったのよ」
暁子は、咄嗟にでまかせを言った。
「この頃いつも遅いのね。私、もうずいぶん暫くお父さんに会っていないみたい」
「そんなことないでしょ」
「お母さんは毎日顔見ているでしょうけど、私は日曜日に会ったきりよ」
香織は不服そうに口をとがらせると、
「たまには家庭サービスしてくれないと、家庭がホーカイするっておどかしておいて」
と、ませた口調で言った。
「崩壊だなんて言葉、知っているの」
暁子は苦笑した。会社へ電話してみようか、と思ったが、一晩家をあけたぐらいで騒ぎ立てるのもみっともない、と思いとどまった。
夫からの連絡はないまま、一日が過ぎた。初めて無断外泊をした夫の心理として、今日は早く帰って来るだろう、と暁子は自分なりの解釈をして、久しぶりで三人分の食器をテーブルに並べて夫を待った。
銀座にある夫の会社から私鉄沿線のマンションまでは、一時間あまりかかる。定時に退社すれば、六時半までには帰り着くはずである。香織のみやげに菓子などを買うにしても、三十分はかかるまい。
だが、夫は七時過ぎても帰って来ず、香織が空腹をうったえるので先に食事をした。暁子は食欲がなく、サラダを少し食べただけだった。
夫の食器だけ残して後片付けをし、入浴も香織と先に済ませた。帰りの遅い夫には馴れているが、昨夜外泊したことについて連絡もせず、また今夜もどこかで飲んでいるのか、と思うと、暁子は内心穏やかではなかった。
自分は、夫のことにあまり干渉せぬよう心掛けて来たつもりである。帰宅が遅いことについても、不服を言うことを抑えて来た。日曜日に、家族連れで行楽地に行くことなどは、もう長い間絶えて無い。娘が見る父親は、休日の日に眠っているか、横になってテレビを観ている姿である。
何も言わない妻に、夫は甘えているのだろうか、それとも侮るようになったのだろうか。
今夜は、帰って来るまで起きて待っていよう。そして、昨夜はどこでどう過したか問い詰めねばならない。夫が妻の知らぬ夜を過すということにまで寛容であっては、やがて収拾がつかなくなる。夫婦の間といえども、守るべき規律はある、と暁子は思った。

わずかの間うたた寝をしていたのか、目を覚すと、テレビの深夜放送が終り、画面が白く光っていた。ソファに不自然な姿勢でよりかかっていたため、肩や背が痛い。

テレビのスイッチを切り、暁子は編みかけのセーターを編み始めた。香織の学校のバザーが、秋に開かれる。手作りのものを一点出品せねばならないのだが、香織の話では、ミシンを踏んだり、編み物をしたりすることが不得手な母親が多くて、みなデパートなどで手作りの品を買って来て間に合わせると言っているという。

暁子は少女の頃から手仕事が好きで、雑誌の付録などについているレース編みや、ぬいぐるみの人形や動物、パッチワークのクッションやベッドカバーなどをよく作ったものである。短期大学を卒業してから結婚するまでの間に、洋裁学校へ通ったこともあるが、夫の帰りを待つ暇潰しには、いつも手許に置いていて、すぐとりかかれる編み物などが最適であった。

午前三時を回る頃には、さすがに疲労と睡魔が重く全身にのしかかって来た。ソファに横になって婦人雑誌の頁を繰っていると、夫の浮気について書かれた手記が特集されているのが目をひいた。

賢明に処理して家庭の平和を取り戻した例、いたずらに騒ぎ立てて夫を追い詰め、結果的に夫と愛人との結びつきを強固にしてしまった例などが何篇か載っていて、身上相談の回答者が、男の浮気は一時的なはやり病のようなものなのだから、家庭を捨ててまでのめり込む例は少ない、早期発見と、適切な治療さえすれば、大事に至ることはない、という意味のことをのべていた。

早期発見には、夫の言動や持ち物などに気を配ることが必要だろうが、自分は一旦家を出た夫がどんな時間を過しているのか気にしたこともない。帰宅が遅い日が続いても、仕事の延長だという説明だけで納得していた。無断外泊してさえ、会社へ電話することもせず、放置していた。これは妻として、いささか無関心過ぎたかもしれない。言い換えれば、愛情が薄いということだろうか。

手記を書いている妻たちは、なまなましく取り乱して、夫の身辺を必死で詮索している。理性を失い、狂乱して夫を失う結果となったとしても、その妻の心情には憐れをそそられる。夫にとって物わかりがよすぎる妻、嫉妬の片鱗も抱かぬ妻が、果して好ましいものであるかどうか、考えさせられた。

夫は、とうとうその夜も帰って来なかった。丸二晩、無断で家をあけたのである。一晩だけなら、徹夜麻雀か、あるいは飲み潰れたのか、とも考えられるが、二晩となると、

異常である。

やはりこれは、夫の身に何か起ったに違いない。事故か、急病か、それも、本人に意識があれば、当然家に連絡を頼むだろうから、相当の重症ということになる。しかし、夫のポケットの中には、通勤定期、名刺入れ等、氏名や住所を明らかにするものがはいっているはずである。新聞に出ていたノックアウト強盗に襲われたのだろうか。泥酔している人になぐりかかり、痛手を負わせて懐中物を奪う強盗が出没しているという。

暁子は波立つ胸を抑え、時間を見はからって会社へ電話をしてみた。夫の代りに、夫の親しい同僚の早瀬が出た。

「ああ、奥さんですか。三枝くん、どうかしましたか」

「あの、主人は出社しておりませんのでしょうか」

「え？　昨日から出て来ていませんよ。病気じゃなかったんですか」

早瀬のほうが、意外な声を出した。

暁子は、一瞬言葉が出なかった。

「もしもし、どうしたんです。何かあったんですか」

早瀬の声が、心配そうな響きを帯びてきた。

「たいしたことはないと思うんですけれど、二晩も無断で家をあけたもんですから。でも、会社へは出勤していると思っていました」

「全然連絡なしですか。こんなことはよくあることなんですか」

「よくあることなら心配しません。結婚して初めてなので。おとといはどこかで飲み潰れたのかと思っていたんですけれど――」

「おとといの帰り、誰と一緒だったか調べてみましょう。なに、こうしているうちにも会社へ出てくるかもしれません。御心配はいらないと思います」

暁子は、それが単なる気安めではないことを願いながら、受話器を置いた。しかし、飲み潰れたにしろ、浮気にしろ、家はあけても、会社まで無断欠勤することは考えられない。外泊よりも、そのほうが重大である。

長野県にいる夫の両親や、都内に住む夫の兄に問い合せてみようか、と思ったが、親兄弟の許へ行くなら誰にもはばかることはないのだから、暁子にも無断で、会社へも無届けのままにしておくはずはない。騒ぎ立てて心配をかける結果になるので、もう一日様子を見よう、と分別した。

本人か、あるいは警察か病院などから連絡があるかもしれない、と思って、暁子は家をあけることが出来ずに、一日中不安を抱えて過した。夕方近くなって、早瀬から電話があった。

「どうですか。何か連絡ありましたか」

「いいえ」
「やはり少しおかしいですな。善後策を考えなければなりませんから、今日これからお寄りしましょう」
「すみません。私のほうからお伺いすべきなのですが、留守中ひょっとして何か連絡がはいるかもしれませんので」
「ええ、家は空けないほうがいいでしょう。なに、どうせ同じ方向ですから御遠慮はいりません」
早瀬が心配に加わってくれたことで、暁子は心強くなった。と同時に、やはりこれはただごとではないのだ、という緊迫感に心臓が締めつけられるような気がした。
早瀬が来たのは六時頃だった。暁子は買物にも出掛けなかったので、鮪をとり、ありあわせのサラミソーセージとチーズを切って、ビールの栓を抜いた。
「奥さん、最近三枝くんのことについて、何か気がついたことはありませんか」
「いいえ、別に」
そう答えながら、暁子は恥じ入った。妻は、ただ寝に帰って来るだけのような夫と、満足に言葉を交わしたこともない。
「そうですか。実は少し気にかかることがありましてね」
早瀬はためらいの色を見せていたが、
「奥さん、三枝くんは金のいるようなことをしていませんでしたか」
と言った。
「と申しますと？」
「博打とか、投資とか」
「麻雀は好きなほうでしたけれど、そのほかのことは知りません。投資と言っても思いあたりません——」
「女はいませんでしたか」
「女——ですか」
暁子は、いないと確信を持って言うことが出来なかった。思いあたるような事実は掴んでいないが、いないとも断言出来ない。
「実は、私は少しかれに金を貸しているんですが」
「え？　お金をお借りしているんですか」
改まって言うからには、煙草銭や、コーヒー代を立て替えたという程度の額ではあるまい。思いがけぬ早瀬の言葉に、暁子は狼狽した。
「こんなことを奥さんに言うつもりはなかったんですが、一度や二度のことではないんですよ」
「いったい、いくらぐらい拝借しているんでしょう」
暁子は顔色の変るのが自分でもわかった。
「いや、金額はたいしたことはないんですが、ほかにもかなり大勢から借金していることがわかりましてね。三万と

か五万とかの金ですから、誰も何のための金か詮索しないで貸していたようですが、それが積り積って家出の原因になったのではないかと思って」

早瀬の口にした〝家出〟という言葉が、暁子の胸を刺した。夫の外泊を強いて大袈裟に考えまいとしていたが、やはり家出というべきことなのだろうか。

夫が自分に秘密を抱いていたということは、相談しても甲斐のない妻と思っていたからだろう。実際問題として、多額の金を調達する力はないが、夫の悩みを一緒に悩むことは出来る。夫の悩みは妻の悩みではないか。妻に秘密を持っていることで、夫の心の負担は一層重くなっていたことだろう。

夫の家出はショックに違いないが、夫が妻を一心同体と考えていなかったことに、暁子は更に大きなショックを受けた。

「三枝くんがおとといから会社を出た時は一人だったそうで、その後の様子については知っている者がいません。奥さんのほうには、全く心あたりはないんですか」

「余計な心配をかけまいと思っていたのですが、両親や兄弟などのところへ連絡してみます。そんなにみなさまにお金をお借りしているとすれば、当然肉親に借りているはずですから、何のためのお金か言ったかもしれません。それに、こうなっては隠しておけることではありません」

早瀬は、自分も出来るだけ情報を集めてみようと約束して帰って行った。事故ということも考えて、一応警察へ届ける必要があるかもしれない、と言っていたが、多額の借金をしているということになれば、事故よりも、返済の方途に窮して身を隠したと考えるほうが自然だろう。

夫の両親よりもまず兄の俊一に電話をすると、マンションのローンが払えない、と言って来たので、数度にわたって三万、五万と貸し、合計で二十万円になっている、という。

「しかしね、私もサラリーマンだから、そんなに度々は貸せない、と十日ばかり前にことわったよ。二十年ものローンを払う買物が、今からそんなに苦しい状態では到底無理だ、はじめにちゃんと計画を立てたのか、と言ったら、不景気で予定していた昇給も思わしくなく、ボーナスも少なかったから、番狂わせだと言っていた。いったい家庭経済はどうなっているんだね。マンションというのは、きみらにはまだ分不相応の買物だったのじゃなかったのか」

暁子は、家計をあずかる妻の自分が責められているような気がして、弁解せずにはいられなかった。

「贅沢だとは思ったんですけれど、アパートの家賃は払い捨てですが、マンションのローンは払い終えれば自分たち

のものになると思ったものですから」
「しかし、アパートの家賃と、マンションのローンとでは、大分負担が違うだろう」
「実は頭金だけ実家の父が払ってくれたものですから、月月の払いは五万円程度で、それまでいたアパートと同じでした」
「あんたの実家から、そんな援助をして貰っていたのか」
「いえ、援助というわけでは。うちも豊かというわけじゃありませんから——。父の退職金を一時借りたという形で、いずれ少しずつ返す、と繁も言っていましたし」
「あっちこっちに借金をして回っているということを、あんたは全く知らなかったのかね」
「はい、何も言ってくれなかったものですから」
「しかし、繁の様子で、変だということはわかりそうなものじゃないか」
「でも、毎日帰りが遅くて、家へはただ寝に帰って来るようなものでしたから」
「そんな状態が続いていて、心配はしなかったのかい」
俊一と話をしていると、自分が至らぬために夫を窮地に追いやったような感じがしてくる。
「警察に、捜索願いを出したほうがいいでしょうか」
俊一は少しの間無言だったが、
「それはちょっと待ったほうがいいかもしれない」
と言った。
「でも、もし事故とか、急病とかで、意識不明のままどこかに収容されているとしたら——」
「それよりも、どうも金策に窮して蒸発した公算が大きいからね」
早瀬は家出と言ったが、蒸発という俊一の言葉に暁子は胸を衝かれた。
「私も、突然のことで、いますぐ何とも言えないが、あまり騒ぎ立てて、会社でのかれの立場がまずくならんよう気をつけて下さいよ」
俊一に言われて、そういうこともあるのか、と暁子は初めて気づいた。
会社の同僚たちにそんなに借金をしているのなら、両親からも借りているかもしれない、と俊一は言う。夫は案外親思いのところがあり、年をとった両親に心配をかけるようなことはしないのではないか、と暁子には思われたが、もう他に心あたりはない。
信州の家のダイヤルを回すと、夫の母が出た。
「ああ、暁子さんかい。軀の具合はその後どうなの？」
「はあ、私は元気でおります」
「そう、それはよかった。それで、いつ退院したんだえ？」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.